

# 大学生の過去の読書経験は単独文の読みに影響を与える

—主語・目的語省略文に対する文自然度判断から—

澤 崎 宏 一

『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）  
第17巻第1号（2018年9月）抜刷

## 【論文】

## 大学生の過去の読書経験は単独文の読みに影響を与える

—主語・目的語省略文に対する文自然度判断から—

澤 崎 宏 一

## 1. はじめに

読書経験の多寡と文章理解力の間には、これまで何らかの正の相関関係が報告されている。Stanovich and Cunningham (1992) は、メディアに関する知識や選好性から得たデータを読書経験の指標として、米国人大学生 (300人) の読解力との関係を分析したところ、読書経験は語彙・スペル・文章理解力と相関していることがわかった。澤崎 (2012a) は、日本人大学生 (80人) を対象に、読書習慣と読解力 (自己申告) に関するアンケート調査を行い、小説などの文庫本の読書量が (新聞・雑誌・漫画などよりも) 文章理解力と強く相関していることを報告している。さらに、中学時代や現在といった、ある一点の読書習慣よりも、過去から現在までの総読書量が文章理解力と強く相関していることを示した。日本人小学校児童 (992人) を対象とした調査でも、猪原 (2016) や猪原・上田・塩谷・小山内 (2015) が、読書量が文章理解力と語彙力に対して正の相関を持つことを示している。

Kintsh (1988) の構築統合モデルによると、文章理解は、テキストからの情報と読み手の一般知識から得られる情報とが、お互いに結びつきながら深まっていくとされる。読み手の一般知識が、様々な過去の経験をもとに形作られるならば、読書経験もまた、そのような経験のひとつと考えられるだろう。本稿では、読書経験を読書媒体や時期別に分類し、それぞれが大学生の文理解にどのような影響を与えるかを調査する。読書と文理解の関係を考える時、長文 (文章) 理解を想定することが一般的かも知れないが、本研究では、文章ではなく単独文に焦点を当て、たとえ文単位の理解であっても読書経験の影響を受けるかどうかを検証する。ただし、ここでいう文理解とは、ある文が正しく理解されたかどうかではなく、どの程度自然と判断されたかをもって分析の対象とする。具体的には、主語や目的語が省略された単独文に対する自然度判断が、現在や高校時代の読書経験よりも、小中学校時代の読書経験の影響を受けることを指摘する。さらに、読書経験の多い読み手は、完全文と省略文の違いに寛容であるのに対し、読書経験の少ない読み手は、両者の違いの影響を受けやすく、特に主

語省略文に対する強い選好度を示すことを、併せて示していく。

## 2. 読書経験と単独文理解

文単位の読みと読書経験の関係については、いくつか研究報告がある（澤崎, 2012b; Sawasaki, 2014）。例えば、澤崎（2012b）は、「が」格の連続数と有生名詞の数を操作した（1）や（2）のような実験文に対して、1から7の中から文の難易度を判断するというテストを行った。

### (1) 「が」格連続あり文

- a. 弁護士が秘書がアパートに書類を配ると決めた。（有生名詞2つ）
- b. 探偵がアシスタントが犯人に子供を渡すと知っていた。（有生名詞4つ）

### (2) 「が」格連続なし文

- a. 課長が会社に部下がホテルを予約したと報告した。（有生名詞2つ）
- b. 教授が社長に専門家が大学生を審査すると約束した。（有生名詞4つ）

上の例文は、Nakayama, Lee and Lewis（2005）の実験文がもととなっており、文頭で名詞句が4連続する中央埋め込み構造をとる。一般に、（1）のような「が」格連続を伴う文は、「が」格の連続を伴わない（2）のような文に較べて難易度が高くなることが知られている（Lewis and Nakayama, 2002; Uehara 1997; Uehara and Bradley, 2002）。また、（b）文のような有生名詞が多数現れる文は、そうではない文に較べて難易度が高くなることも報告されている（坂本・安永, 2009; Nakayama, Lee, and Lewis, 2005）。

澤崎（2012b）は、上の文の難易度が、読み手の読書経験やワーキングメモリ（WM）の影響を受けるかどうかについて調査した。その結果、「が」格の連続による文難易度は、読書経験の多寡とは関連が見られなかった（WMの違いとの関係は認められた）。しかし、有生名詞の数による文難易度は、読書経験の量によって違いが現れ（WMの影響も見られた）、読書経験の少ないグループは、有生名詞の数が多くなると、文を難しく感じるようになった。このことから、読書経験は、統語的解釈の負担が重い「が」格連続文のような場合には影響が現れにくい、語彙や意味解釈の負担が重くなる有生名詞連続文のような場合には、その効果が現れやすいという考察がなされている。

（1）や（2）のような文は、「が」格や有生性にかかわらず、どの条件を見てもある程度難解な文である。しかし、平易な文の読みにも、読書経験の影響が報告されている。Sawasaki（2014）は、（3）のような対となる文について、その自然度を調べた。

大学生の過去の読書経験は単独文の読みに影響を与える

- (3) a. 円高が進んだ結果をもう一度分析しなければならない。
- b. 円高が進む結果をもう一度分析しなければならない。

(3) は、完了を表す「結果」という語彙の意味的性質上、「結果」を修飾する節（円高が進んだ/円高が進む）の時制は (3b) のような現在形（進む）よりも、(3a) のような完了形（進んだ）で表す方が適格だとされる（加藤, 2003）。加藤（2003）はこれを、名詞修飾節に関する語用論的な制約として考察している。

実際のところは、ふたつの文の違いは軽微であり、(3b) が不適格かどうかの判断は個人差があると思われる。しかし調査の結果、読書経験の多いグループは、(3a) に比べて (3b) が不自然であることに対して、より敏感であった。しかし、読書経験の少ないグループは、2つの文の間に自然度の違いが見られなかった。<sup>1</sup>

上記の知見から、読書経験が多い読み手は、読書経験が少ない読み手に比べて、(1) や (2) のような複雑な文の理解はより易しいと感じると言える。また、(3) のような平易な文においても、読書経験の多い読み手は細かな文の違いに敏感で、細部まで文情報を読み取っていると言える。これは、短い単独文を読む場合でも、読書経験の違いが読みに影響を与える可能性を示唆する。しかし、(1) や (2) の実験文は、条件文ごとに構成語彙が異なっている。そのため、実験で求められた文の難易度が、異なる語彙の違いの影響をどこまで受けているかが不明である。また、実験文 (3) は、語彙の統制は行われているが、完了時制を含む修飾節が適格となるような「修飾節+名詞」構造の文自体が、実生活において高頻度で使われるとは限らない。そのため、文の特殊性がその結果にどの程度影響を与えているかがわからない。いずれにしても、単独文の読みににおける読書経験の影響を一般化するためには、さらなる調査結果の蓄積が必要と言えるだろう。

### 3. 本研究の課題と目的

本研究は、日本語では一般的に見られる、主語や目的語が省略された文の自然度判断をもとに、読書経験の多寡が単独文の読みに影響をあたえるかどうかを調査する。本稿で言う読書経験とは、「文章を読む」という行為を、小学校から現在にいたるまでどの程度の頻度で行ってきたかを、アンケート調査を用いて量的に表したものを指す。

先行研究により、(4) に示すような完全文、主語省略文、目的語省略文が単独で提

<sup>1</sup> ただし、この結果は、特定の実験文に見られる限定的なものであった。例えば、過去と非過去の違いが明らかに不自然な、「部屋を掃除したゴミをどこに捨てるか迷った」と「部屋を掃除するゴミをどこに捨てるか迷った」のような文のペアについては、読書経験の量にかかわらず、後者の文が圧倒的に不自然と判断された（Sawasaki, 2014）。

示された場合、「主語省略文>完全文>目的語省略文」の順で、自然度が下がっていくことが報告されている（澤崎, 2015）。つまり、主語省略文が最も自然と判断され、逆に目的語省略文は最も不自然と判断されるという結果であった。自然度の差はあっても、上記の3文はいずれも適格文（文法的）であり、この点が例文（3）と異なっている。

- (4) a. なまいきな社員がえらそうな部長を会議で無視した。（完全文）  
 b. \_\_\_\_\_えらそうな部長を会議で無視した。（主語省略文：最も自然）  
 c. なまいきな社員が\_\_\_\_\_会議で無視した。（目的語省略文：最も不自然）

主語省略文が目的語省略文よりも自然である点については、統語論（Kuroda, 1983; Miyagawa, 1989）からも談話文法（Narimaya, 2003; 成山, 2009）からも支持されているので、「主語省略文>目的語省略文」の結果はうなずける。一方、主語省略文の方が完全文よりも自然である点については、談話文法からの報告があるだけで（久野, 1978; 新屋, 2013; 張, 2018; 久好, 2009）、上の実験文のような、文脈を伴わない単独文でもなぜ同じことが言えるのかはわからず、澤崎（2015）でもその説明はない。例えば、新聞や本を題材に主語省略のコーパス分析を行った新屋（2013）や久好（2009）は、主語の復元が文脈から明らかである場合に主語省略が典型的に起こることを数値で示したが、単独文における主語省略は問題にしていない。<sup>2</sup> しかしここで、澤崎（2015）が示した「主語省略文>完全文」という自然度の違いを、読書経験の多寡により文理解が異なるという先行研究の知見を踏まえて考えるならば、「主語省略文>完全文」は、読書経験の少ない（または多い）読み手のみに見られる特徴的な読み方で、その判断が全体の結果に影響を与えているという可能性がある。あるいは、会話でも文章でも一般的に見られる主語省略という特徴に、読み手がみな等しく慣れ親しんでいるので、単独文を読むときにも主語省略は不自然ではなく、むしろ読みやすいと感じるのであれば、「主語省略文>完全文」は読書経験の多寡に関係なく現れる傾向だとも予測できる。

そこで、本稿では、先行研究で報告されている「主語省略文>完全文>目的語省略文」という自然度の違いが、読書経験の多寡によって変化するかどうかを調査した。さらに、文自然度が読書経験の影響を受ける場合に、小説やネットといった読書媒体の違いや、高校や中学といった読書の時代区分の違いによっても影響が見られるかど

2 主語だけを取り出して分析した主語省略率は、新屋（2013）の用いたコーパスでは38.6%であったが、久好（2009）では56%にのぼっている。

大学生の過去の読書経験は単独文の読みに影響を与える

うかも分析の対象とした。

## 4. 調査方法

### 4.1 参加者

静岡県立大学で、人文・社会科学を専攻する学生52名が調査に参加した（2012年7月に実施）。全員が、日本国内で高校までの教育を受けた日本語母語話者で、澤崎（2015）の参加者と同一である。平均年齢は19歳（SD: 1.17）であった。

### 4.2 材料と手順

調査は、読書経験に関するアンケート調査と文自然度に関する言語調査から成り、参加者全員が2つの調査に参加した。ただし、文自然度に関する言語調査は、澤崎（2015）で得たデータの大部分をもってあてた。

読書経験に関するアンケート調査は、表1にある1から11までの11の設問について、7段階評定で回答する形式であった。<sup>3</sup> 設問3から設問7までの5項目は、現在の読書経験を文庫本・新聞・ネットなどの媒体別に分けて尋ねたもので、設問8から設問11までの4項目は、小学校から現在までを4つの時代区分に分けて、それぞれ本全般に対する読書経験を尋ねた。回答には、表2にあるような1点から7点までのスケールを用意した。読書の好き嫌いを問う設問2以外は、全て同一のスケールで読書量を尋ねており、評点が7点に近いほど読書経験が豊富で、1点に近いほど読書経験が乏しいことを示唆する。設問12だけは、読書量を評定するのではなく、好きな作家の名前を挙げるというもので、これは、好きな作家名を挙げることができるかどうかを読解習慣や読解力と相関しているという Stanovitch and Cunningham（1992）の知見に基づく設問である。

文自然度に関する言語調査は、先述の（4）や、下の（5）のような3つの条件文から成る。

- (5) a. 小さな子供が部屋の電気を泣きながらつけた。（完全文）  
 b. \_\_\_\_\_部屋の電気を泣きながらつけた。（主語省略文）  
 c. 小さな子供が\_\_\_\_\_泣きながらつけた。（目的語省略文）

3 読書経験に関するアンケート調査は、澤崎（2012a）で用いたものに若干修正を加えて使用した。

表1 読書経験に関するアンケート調査設問一覧

現在の読書経験(媒体別)	
1	現在、日本語で、本、新聞、雑誌、インターネットの記事などをどのくらい読みますか？
2	日本語で書いてあるもの(本、新聞、雑誌など)を読むのは好きですか、嫌いですか？
3	通常(試験前など、時間の余裕がない時を除く)、日本語で文庫本(小説など)だどのくらい読みますか？
4	通常(試験前など、時間の余裕がない時を除く)、携帯やインターネットで記事やブログなど、日本語で文章をどのくらい読みますか？
5	通常(試験前など、時間の余裕がない時を除く)、日本語で新聞をどのくらい読みますか(インターネットを含まない)
6	通常(試験前など、時間の余裕がない時を除く)、日本語で雑誌(週刊誌・月刊誌)をどのくらい読みますか？
7	通常(試験前など、時間の余裕がない時を除く)、日本語で教科書をどのくらい読みますか？
これまでの読書経験(年代別)	
8	今、どの程度本を読んでいますか？
9	高校生の時、どの程度本を読みましたか？
10	中学生の時、どの程度本を読みましたか？
11	小学生の時、どの程度本を読みましたか？
その他	
12	好きな(好きだった)小説家やノンフィクション作家の名前を何人かあげてください。(誰もいない場合は空欄で)

## 大学生の過去の読書経験は単独文の読みに影響を与える

表 2 読書経験に関するアンケート調査回答スケール

設問	回答スケール						
設問 2	とても嫌い		どちらかと言えば嫌い		どちらかと言えば好き		とても好き
	1	2	3	4	5	6	7
設問 2 以外	殆ど読まない		たまに気が向いたら読む		数日に1度読む		毎日読む
	1	2	3	4	5	6	7

上記のように、完全文、主語省略文、目的語省略文の3文でセットとなる条件文を6組用意した。そのうち半数は、(4)のように有生名詞が目的語となるようにし、残り半数は、(5)のように無生名詞が目的語となるようにした。これにフィラー文を22文混ぜ込み、合計40文での調査を行った。

実験文とフィラー文は、(4)や(5)にあるような下線や空欄を削除した上で、同じ条件文同士が隣り合わないよう擬似ランダムに配置された。その際、同じ参加者が同じ組の実験文を2文以上読むことのないように、ラテン方格法により3種類のアンケートが作られた。その上で参加者は、文ごとに、その自然度を数字で判定した。自然度は、1から7のスケールではなく、文が自然であれば1に近く、不自然と感じれば点数を高く評定するよう指示され、点数の上限は参加者が自由に決めることができた (Magnitude Estimation 法)。

読書経験に関するアンケート調査と文自然度に関する言語調査は、同じ参加者に対して、ふたつ同時に実施した。ふたつのアンケートの回答に要した時間は、20分程度であった。

### 4.3 予測

もし、主語や目的語の省略文に対する自然度が、読書経験の影響を受けるならば、(4)や(5)の読み方も、読書経験の多寡によって違いが出ると考えられる。たとえば、読書経験が多い読み手は、主語省略文と完全文の自然度に違いがなく、読書経験が少ない場合は、完全文より主語省略文の方が自然だと感じる事が考えられる。またはその逆も可能であり、つまり、「主語省略文>完全文>目的語省略文」という自然度の違いは、読書経験の豊富な読み手とそうでない読み手との間で、同一ではないはずである。



## 5. 結果

本節では、読書経験に関するアンケートと文自然度判断に関する言語調査のそれぞれの結果を、まず簡単に報告する。その後、読書経験の違いと文理解の関係について検証する。

### 5.1 読書経験に関するアンケート結果

表3は、アンケートの質問ごとに回答評定の平均値を示したものである。まず媒体別の結果を概観してわかることは、評定が比較的高い項目は質問1(総合読書頻度)、質問2(好き嫌い)、質問4(ネット読書)で、低い項目は質問3(文庫本)、質問5(新聞)、質問6(雑誌)、質問7(教科書)ということである。つまり、読書は好きで、日常的に文章を読んでいるが、ネット上での読書時間が多く、紙の読書に費やす時間は少ないという傾向が見える。

年代別の読書経験をみると、質問8(現在)から質問11(小学校)に向かうにしたがって評定点が上がっている。つまり、小中学校の頃は比較的良好本を読んでいたが、高校、大学に上がるにつれて、本を読む習慣が減ってきているということがわかる。

好きな作家名を答える質問12は、名前があがった人数は0人から6人までと幅広かった。平均人数は1.88人であったが、中央値は1人で、好きな作家をあげなかった0人回答が11人いた。

### 5.2 文自然度判断に関する言語調査結果

調査後、実験文の妥当性を確かめるため、調査に参加しなかった19人に対して事後調査を行った。文の穴埋め課題を用いて、実験文12文(主語省略6文、目的語省略6文)の省略部分に適切な語句を埋めるよう指示したところ、目的語が省略されているとは判断されにくい文が1文あった。このため、この実験文は以後の分析から削除された(残った実験文は添付資料を参照)。<sup>4</sup> 埋められた語句の割合は、1人称代名詞(5.8%)、2人称代名詞(0%)、3人称名詞(60.5%)、その他(33.7%)という結果で、1人称や2人称名詞が省略されていると判断される割合は、低かった。

次に、回答データが参加者ごとにz-scoreに変換され、0を平均値として自然度が高ければ負の値に、自然度が低ければ正の値に置き換えられた。<sup>5</sup> その結果、主語省略文(-.79)、完全文(-.37)、目的語省略文(.33)の順に自然度が低くなることがわかった。3条件間で分散分析を行なったところ、違いは有意であった( $F(2, 257) = 64.886, p < .001$ )。また、多重比較(bonferroni)では、全ての比較で有意差が確認さ

4 この処理は、元研究となる澤崎(2015)では行われていない。

5 z-scoreの計算式は、「z-score = (個々の評点 - 平均評点) / 標準偏差」。

大学生の過去の読書経験は単独文の読みに影響を与える

表 3 読書経験に関するアンケート調査結果 ( $n = 52$ )

	現在の読書経験 (媒体別)						これまでの読書経験 (年代別)						その他 質問12	
	質問1	質問2	質問3	質問4	質問5	質問6	質問7	合計評点1	質問8	質問9	質問10	質問11		合計評点2
<i>M</i>	5.50	5.79	3.65	5.75	2.69	3.25	3.33	24.17	3.81	4.04	4.40	4.65	16.90	1.88
<i>SD</i>	1.50	1.19	1.60	1.79	1.90	1.37	1.37	4.54	1.55	1.75	1.77	1.87	5.41	1.69

表 4 読書経験高グループと低グループの人数比 ( $n = 52$ )

	現在の読書経験 (媒体別)						これまでの読書経験 (年代別)						その他 質問12	
	質問1	質問2	質問3	質問4	質問5	質問6	質問7	合計評点1	質問8	質問9	質問10	質問11		合計評点2
高グループ	41	46	17	41	11	12	11	11	15	22	27	34	24	25
低グループ	11	6	35	11	41	40	41	41	37	30	25	18	28	27

表 5 読書経験と文自然度判断の関係 ( $n = 52$ )

	現在の読書経験 (媒体別)						これまでの読書経験 (年代別)						その他 質問12	
	質問1	質問2	質問3	質問4	質問5	質問6	質問7	合計評点1	質問8	質問9	質問10	質問11		合計評点2
省略の主効果 (文条件)	**	**	*	*	*	*	*	**	*	*	*	*	*	*
読書経験の主効果 (高低グループ)	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>
交互作用	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	*	*	*	<i>ns</i>

\* =  $p < .05$     \*\* =  $p < .01$

れた ( $p < .001$ )。なお、実験文の半数を有生目的語に、残り半数を無生目的語にしたので、有生名詞文と無生名詞文の評定差を比較したところ、有意差は見られなかった ( $t(244.689) = -.903, p > .1$ )。<sup>6</sup>

### 5.3 読書経験と文自然度判断の関係

前節で述べた文理解の結果が、読書経験の違いとどう関わるかを確認するために、まず、読書経験に関するアンケート結果をもとに、参加者を読書経験の高グループと低グループに振り分けた。振り分けは質問ごとに行い、表2の評定スケールの1から4までを低グループ、5から7までを高グループとして一律に区切った。好きな作家を問う質問12は、0人または1人を低グループ、2人以上を高グループとした。質問ごとの高グループと低グループの人数比は、表4に示すとおりである。

次に、読書経験の高低グループと実験文の3条件を独立変数として、そして文自然度の評定を従属変数として、各質問に対して分散分析を行った。表5はその結果である。表からわかるように、読書経験の主効果は、どの質問においても確認できなかった。しかし、交互作用は、中学校の時の読書経験を尋ねた質問10 ( $F(2, 254) = 3.129, p = .045$ )と、小学校の時の読書経験を尋ねた質問11 ( $F(2, 254) = 3.174, p = .044$ )、そして合計評点2 ( $F(2, 254) = 3.066, p = .048$ )において確認された。図1は、これらのうち、合計評点2の結果を詳しく図示したものである。<sup>7</sup>

図1を見ると、実験文3条件間の自然度判断の違い(広がり)は、高グループよりも低グループの方が大きいことがわかる。単純主効果の検定(bonferroni)を行なったところ、低グループでは、3条件全ての比較に有意差が見られた ( $p < .01$ )。しかし、高グループでは、完全文と主語省略文との間に違いはなく ( $p > .1$ )、目的語省略文だけが他2つよりも不自然と判断された ( $p < .01$ )。つまり、完全文に比べて主語省略文の方がより自然と評定された全体の結果は、主に低グループの自然度評定が影響を及ぼしたためと考えられる。

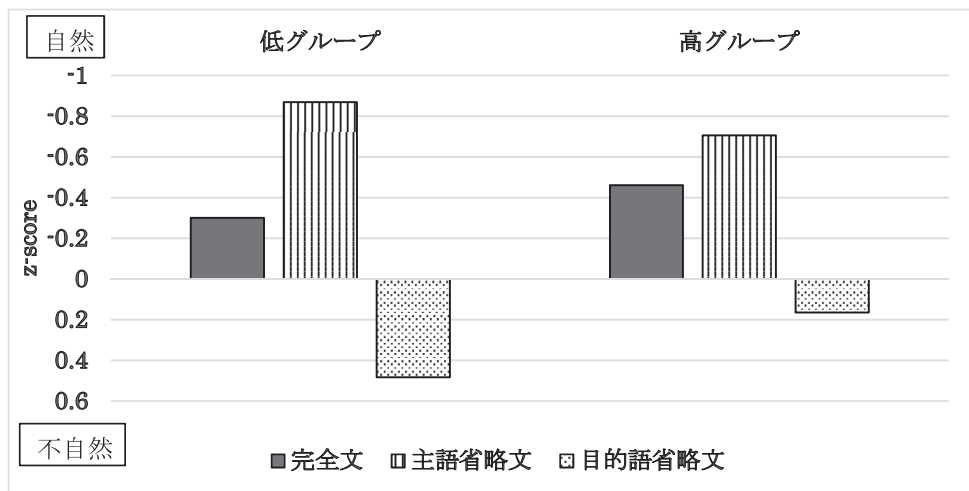
次に、条件文ごとに高グループと低グループを比較した場合、完全文と主語省略文は、グループ間での違いはなかったが ( $p > .1$ )、目的語省略文では違いが見られた ( $p < .05$ )。つまり、高グループは目的語省略文を、とても自然な文だとは感じないものの、(低グループほど)特に不自然とも感じていなかったことになる。これらのことから、高グループの読み手は、3種類の文の中で特に強い不自然さを感じた文はなく、完全文と主語省略文に関しては、その違いすらなかったことがわかる。こ

6 名詞の有生性による自然度の違いが観察されなかったのは、実験文が少ないことに起因している可能性がある。事後調査を経て有生目的語文1種類が分析から削除されたあとに残ったのは、有生目的語文2種類と、無生目的語文3種類だった。元実験となる澤崎(2015)では有生性の違いが確認されており、先行研究でも有生性の違いと文理解との関係を指摘する知見は多いため(井上, 1998; 坂本・安永, 2009; 佐藤, 2011; 澤崎, 2012b 他)、有生性との関係については今後さらなる調査が望まれる。

7 読書経験の高低グループを、中央値付近で二分して統計分析した場合も、似た結果となった。

大学生の過去の読書経験は単独文の読みに影響を与える

れに対して、低グループの読み手は、3つの条件文に対する自然度が全て異なっており、目的語省略文に対する強い不自然度と、主語省略文に対する強い選好度が特徴的であった。なお、これと似た結果は、上述の合計評点2からだけでなく、質問10（中学校の時の読書経験）と質問11（小学校の時の読書経験）の回答からも確認することができた。



(注) ここでの z-score は、負の値は相対的に自然度が高く、正の値は相対的に自然度が低いことを表すため、縦軸の正と負の目盛りを逆に表示してある。

図1 読書経験高低グループ別（合計評点2）に見た文自然度判断（ $n=52$ ）

## 6. 考察

本稿は、読書経験に関するアンケート調査と文自然度判断に関する言語調査を通して、先行研究で報告されている「主語省略文>完全文>目的語省略文」という自然度の違いが、読み手の読書経験の多寡によって変化するかどうかを調査した。その際、読書経験を読書媒体の違いや時代区分の違いから、高グループと低グループに分けて分析した。

### 6.1 媒体別に見た読書経験と文自然度判断の関係

まず、媒体別の読書経験と文自然度判断の関係は、本研究では確認することができなかった。アンケート調査では、文庫本、新聞、雑誌、教科書などの紙の読書と、ネットでの読書に細分化して読書習慣を尋ねたが、どの媒体においても、読書量の違いが文自然度判断の違いに結びつくという結果は得られなかった。ただし、表4が示すとおり、高グループと底グループの人数比にはかなり偏りがあるため、この結果の解釈

には注意が必要である。特に、人数比の偏りは、媒体別読書経験において顕著であった。<sup>8</sup> また、媒体別の設問は現在の読書習慣についてのみ尋ねるものだったので、過去の媒体別の読書習慣が文自然度判断に与える影響については、今回の調査からはわからず、さらなる調査が必要である。

## 6.2 年代別に見た読書経験と文自然度判断の関係

年代別の読書経験と文自然度判断の関係は、小学校時代と中学校時代の読書経験、さらに小学校から現在までの読書経験の総和において確認することができた。しかし、高校時代の読書経験や、現在の読書経験だけを切り取ると、読書経験の多寡が文自然度判断に違いをもたらす結果にはならなかった。

小中学校といった、小さい時の読書経験が含まれる場合に限って効果が現れたことを、どのように捉えるべきだろうか。これには、ふたつの解釈が考えられる。ひとつは、小中学校時代に比べて、高校や大学では読書量が少ないため、文理解への影響を示すほどの関連性が生じないという可能性である。高校以降の読書量がそれまでと比べて減少することは、表3の結果から見てとることができる。その他にも、平山(2009)の報告によると、メタ分析を併用した年代別の読書量比較から、1ヶ月間の読書冊数は、小学生(9.7冊)から中学生(2.8冊)、高校生(1.5冊)や大学生(2.1冊)に上がるにつれて減少している。また、不読者率も、小学生(6.0%)から中学生(22.7%)、高校生(50.2%)、大学生(32.9%)に上がるに従い増加傾向を示しており、本研究のデータと一致している。さらに、全国1,000人以上の大学生の読書習慣を2006年と2012年で比較した平山(2015)は、1週間の読書日数や1日の読書時間といった大学生の読書量が、6年の間に減少したことを指摘した。小中学校時代に比較的読書経験が豊富な学生であっても、年齢が上がるにつれ読書量が少なくなる傾向に加えて、同じ大学生でも年々読書量が減っていることを合わせると、高校や大学での読書経験が、文理解との関係性を示すには至らなかったことが充分考えられる。<sup>9</sup>

なお、紙による読書が減った代わりに、パソコンの使用頻度が増えたことが報告されており(平山, 2009)、本調査結果の表4を見ても、ネット上の読書量を問う問4の評定が一番高い。しかし、先述したとおり、ネット読書と文理解との関係性は、本研究では確認ができなかった。

高校や大学での読書経験が文理解との関連性を示さなかったことに対するもうひとつの解釈は、言語情報の種類によっては、若い時の読書経験の方が文理解に強い影響を与えるという可能性である。金水(2003)は、博士語や老人語と呼ばれる「～なのじゃ」のような表現に『役割語』という名前をつけ、これらは現実世界では使われる

8 注7参照。

9 平山(2015)は、携帯やパソコンが普及したことやアルバイトに忙しいことなどを、大学生の読書時間が減少した理由として挙げている。

大学生の過去の読書経験は単独文の読みに影響を与える

ことがないが、母語話者がみな共有している言語上のステレオタイプであるとした。博士語以外にも役割語は多数あり、このような言語感覚は、幼少期に物語などを繰り返し読んだり聞いたりすることで形成されると主張する。しかし、外国語として日本語を学ぶ成人学習者にとっては、アニメを見たり小説や漫画をよく読む人であっても、役割語の習得が難しいという報告がある（坂・澤崎, 2018; 宿利・プーリック・ミロノワ・ノヴィコワ・カリュジノワ・シモノワ・大内, 2015）。<sup>10</sup>

さらなる検証が必要だが、これらの知見から解釈すると、主語省略や目的語省略文の自然度のような、言葉に関する基本的な感覚の形成も、小さい頃の言語経験（読書経験）の影響が深く関わっているのかもしれない。このことは、文章理解はテキスト情報と読み手の一般知識との結びつきによって深まっていくとする、構築統合モデル（Kintsch, 1988）の考え方にも沿うものである。読書が読み手の一般知識の一部を形作るとすれば、小学校や中学校の時の読書経験は、大人になってからの文理解になんらかの形で影響を与えると考えられるだろう。

### 6.3 読書経験高グループと低グループの違いの理由

調査の結果、読書経験の少ない読み手は、3つの条件文の違いに大きく反応し、自然な文と不自然な文との評定差が非常に大きかった。それに対して、読書経験の高い読み手は、3つの条件文に対する反応の違いが比較的緩やかであった。このことはつまり、低グループが特に不自然だと判断した目的語省略文は、高グループはそこまでの不自然さを感じていなかったということである。また、低グループが最も自然だと判断した主語省略文も、高グループは完全文と変わらぬ自然さを感じていた。

この結果から、低グループは、高グループの読み手に比べて、様々な種類の文を読むことに不慣れたため、文を読むにあたり過去の経験の影響を受けやすく、それが文自然度の違いとなって現れたと考えられる。文理解に影響を及ぼす過去の経験のひとつに、出現頻度がある。主語省略文に比べて目的語省略文が不自然だと感じるのは、それだけ目的語省略文の出現頻度が低いことを示唆する。日本語会話における名詞句の出現頻度を調査した Hinds (1983) は、主語/主題の省略率が目的語の省略率に比べてはるかに高いことを報告している。例えば、女性に対するインタビューでは、主語/主題の省略率が70%を越えるのに対して、目的語の省略率は約20%に過ぎなかった。男性同士の会話を分析した場合も、主語/主題の省略率が約60%であるのに対して、目的語の省略率は20%強にとどまっていた。同じような省略頻度の違いは、話し言葉だけでなく、書き言葉においても報告されている（飯田・橋本・鳥澤・黒橋・乾・宮尾・柴田・笹野, 2015）。このように、主語省略文と目的語省略文は、出現頻度にお

10 言語知識にとどまらず、子どもの頃の読書が後の人生に幅広い影響を与えることもわかっている。例えば濱田 (2013) は、中学生までの読書量が、大人になってからの意識・意欲・行動にプラスの影響を与えることを報告している。

いて非対称的であり、読書経験の少ないグループは、こうした出現頻度の影響を受けやすく、単独文を読む場合でも、読書経験の多いグループが感じるよりも目的語省略文を不自然と感じたのかもしれない。

同様に、読書経験の少ないグループが、主語省略文を完全文よりも自然だと判断したのも、主語省略の出現頻度が非常に高いという経験知と関係があると思われる。さらに、主語が明示されないことにより、その主語を短期記憶にとどめておく必要がないため、読み手の処理負荷が軽くなることも、高い自然度を招いた一因かもしれない。(目的語省略文も、短期記憶の点からは処理負荷の軽減につながるが、出現頻度が低いために、自然な文とは判断されない。)

それに比べて、読書経験の豊富な読み手は、出現頻度や記憶の負荷などによる影響を受けにくく、主語省略文だけを特に自然と感じることも、目的語省略文だけをことさら不自然と感じることもない。つまり、読書経験の高いグループは、様々な種類の文を読むことに慣れているので、多少の文の違いに動じることなく自然度の判断ができると言えるだろう。

#### 6.4 先行研究との整合性

ここまで、読書経験の多い読み手は、少ない読み手に比べて、完全文と省略文の違いに寛容であると述べてきた。これは、読書経験の違いが、短文の読みにも影響を与えるという先行研究の知見に沿う結果である(例文(1)、(2)、(3)参照)。しかし、読書経験の多寡が、具体的にどのような文理解の違いとなって現れるのかについては、先行研究の間で一見するとばらつきがあるように思える。例文(1)や(2)のような、中央埋め込み構造をもつ、文法的ではあるが難解な文の場合は、読書経験の多い読者の方が文を容易だと感じていた(澤崎、2012b)。そして、(3)のような、平易ではあるが文の適格性判断に個人差が生じるような文の場合は、読書経験の多い読み手は不適格な文に敏感であった(Sawasaki, 2014)。しかし、本研究の結果は、読書経験の多い読み手は、完全文と省略文の違いに対して敏感ではなく、むしろその逆であった。

読む文によって、判断が敏感であったりそうでなかったりするように見えるが、これらは全て、読書経験の多い読み手は、文の読みに慣れている結果だと考えることができる。文の読みに慣れていると、適格文である限り完全文と省略文の違いに対して大きな反応の違いはなく、判断が寛容になる。しかし、文が不適格である場合は、細かな情報を読み取ってその不適格さに気づき、判断が敏感になる。その一方で、文の読みに慣れていないと、出現頻度の影響を大きく受けたり、細かな情報が読み取れずに敏感な文の適格性判断が(慣れた読み手と比べて)できなくなるのである。これらの結果は、先行研究の知見を支持するもので、文章ではなく、短い平易な単独文を読む場合であっても、文に対する慣れが読みに影響を与える可能性を本研究は示すことができた。

## 7. 結論

本稿は、大学生を対象に、「主語省略文>完全文>目的語省略文」という単独文の自然度の違いが、読書媒体や年代別の読書経験の多寡によって変化するかどうかを調査した。調査の結果、媒体別の読書経験と文自然度判断の関係は、本研究では確認することができなかった。しかし、時代別に見ると、小学校時代と中学校時代の読書経験、さらに小学校から現在までの読書経験の総和において、文自然度判断との関係を確認することができた。高校や大学での読書経験と自然度判断との関係は見られず、その理由として、高校以降に読書量が減少する傾向が全体的にあることや、小さい頃の言語経験の重要性が示唆された。さらに、「主語省略文>完全文>目的語省略文」という自然度の違いは、主に読書経験の少ない読み手の特徴を反映していることがわかった。読書経験が多い読み手は、文を読むことに慣れているため、文の違いが自然度に与える影響が比較的小さかった。他方、読書経験が少ない読み手は、文を読むことに慣れていないため、出現頻度の違いによる影響を受けやすく、文の種類によって自然度が大きく異なる結果となった。

しかし、本研究で用いた読書経験に関するアンケート調査には、問題点も含まれていた。まず、媒体別の読書経験を問う設問は、現在の読書習慣に限られており、過去の読書経験との関係を測ることができなかった。また、アンケートの回答方法も、1-7のスケールの程度や頻度を問う形式に終始しており、冊数や時間といった具体的な読書量が見えなかったことも、改善すべき点であろう。さらに、文自然度判断の調査も、実験文の数が充分ではなかったことが、結果に影響を与えている可能性があるため、さらなる追調査が必要と思われる。

種々の反省点を含みながらも、本研究は、たとえ短い平易な単独文であっても、過去の読書経験がその読みに影響を与える可能性を支持した点で、意義深いと言える。今後も、これら反省点を踏まえ、文理解と読書経験との関係について、さらに知見を積み上げていくことが重要だろう。

## 付記

本研究は、静岡県立大学平成29年度教員特別研究推進費の助成を受けたものです。

## 添付資料（実験文）

1. a. 年寄りのおばあさんがかわいい孫をバス停まで見送った。（完全文）
  - b. 年寄りのおばあさんがバス停まで見送った。（目的語省略文）
  - c. かわいい孫をバス停まで見送った。（主語省略文）
2. a. なまいきな社員がえらそうな部長を会議で無視した。
  - b. なまいきな社員が会議で無視した。



- c. えらそうな部長を会議で無視した.
- 3 a. 有名な俳優がきれいな写真を撮った.  
b. 有名な俳優が撮った.  
c.きれいな写真を撮った.
- 4 a. 病気の友達が大好きなタバコを健康のためにやめた.  
b. 病気の友達が健康のためにやめた.  
c. 大好きなタバコを健康のためにやめた.
- 5 a. 小さな子供が部屋の電気を泣きながらつけた.  
b. 小さな子供が泣きながらつけた.  
c. 部屋の電気を泣きながらつけた.

### 参考文献

- 濱田秀行 (2013) 「子どもの頃の読書が成人の意識・意欲・行動に与える影響」 独立行政法人国立青少年教育振興機構編『「子どもの読書活動と人材育成に関する調査研究」成人調査ワーキンググループ報告書』 pp.31-40.
- Hinds, J. (1983). Topic continuity in Japanese. In T. Givón (ed.), *Topic continuity in discourse: A quantitative cross-language study* (pp. 95-126). Amsterdam: John Benjamin's Publishing Company.
- 久好孝子 (2009) 「日本語の項省略と『名詞句の同一指示性の識別』」『国際文化研究』15, 165-179.
- 平山祐一郎 (2009) 「これからの大学生の読書について考える」『読書科学』52(4), 200-204.
- 平山祐一郎 (2015) 「大学生の読書変化—2006年調査と2012年調査の比較より—」『読書科学』56(2), 55-64.
- 飯田龍・橋本力・鳥澤健太郎・黒橋禎夫・乾健太郎・宮尾祐介・柴田知秀・笹野遼平 (2015) 「日本語書き言葉を対象とした人間の自然な省略検出の分析」『言語処理学会第21回年次大会発表論文集』 pp. 565-568
- 井上正勝 (1998) 「ガーデンパス文の読みと文の理解」 荳阪直行編『読み—脳と心の情報処理—』 pp.72-89 朝倉書店
- 猪原敬介 (2016) 『読書と言語能力』 京都大学学術出版会
- 猪原敬介・上田紋香・塩谷京子・小山内秀和 (2015) 「複数の読書量推定指標と語彙力・文章理解力との関係—日本人小学校児童への横断的調査による検討—」『教育心理学研究』63, 254-266
- 加藤重広 (2003). 『日本語修飾構造の語用論的研究』 ひつじ書房
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』 岩波書店
- Kintsch, W. (1988). The role of knowledge in discourse comprehension: A Construction-

大学生の過去の読書経験は単独文の読みに影響を与える

- Integration model. *Psychological Review*, 95(2), 163-182.
- 久野暉 (1978) 『談話の文法』大修館書店
- Kuroda, S.-Y. (1983). What can we say about government and binding? *Proceedings of the Western Conference of Formal Linguistics*, 2.
- Lewis, R. L., & Nakayama, M. (2002). Syntactic and positional similarity effects in the processing of Japanese embeddings. In M. Nakayama (ed.), *Sentence processing in East Asian languages* (pp. 85-110). Stanford, CA: CSLI.
- Miyagawa, S. (1989). *Syntax and semantics. Vol. 22: Structure and case making in Japanese*. San Diego, CA: Academic Press.
- Nakayama, M, Lee, S.-H., & Lewis, R. L. (2005). Difficulty of processing Japanese and Korean center-embedding constructions. In M. Masahiko, H. Kobayashi, M. Nakayama, & H. Sirai (eds.), *Studies in language sciences 4* (pp. 99-118). Tokyo: Kuroshio Publishers.
- Nariyama, S. (2003). *Ellipsis and reference tracking in Japanese*. Amsterdam: John Benjamins.
- 成山重子 (2009) 『日本語の省略がわかる本』明治書院
- 坂明佑美・澤崎宏一 (2018) 「日本語母語話者と日本語学習者は役割語の手がかり情報をどのように理解するのか」『言語科学会第20回年次国際大会予稿集』 pp. 204-205
- 坂本勉・安永大地 (2009) 「ガ格三連続文の処理に有生性が及ぼす影響について」『日本言語学会第138回大会予稿集』 pp. 276-281
- 佐藤淳 (2011) 『日本語関係節の処理負荷を決定する要因の検討—コーパスにおける使用頻度の影響を中心に—』広島大学博士論文
- 澤崎宏一 (2012a) 「大学生の読書経験と文章理解力の関係」 『国際関係・比較文化研究』, 10(2), 213-231
- 澤崎宏一 (2012b) 「読書経験と作動記憶が文理解に及ぼす影響—『が』格・有生名詞連続文の難易度判定より—」 *Ars Linguistica*, 19, 21-40.
- Sawasaki, K. (2014). The role of reading experience in construing Japanese gapless relative clauses. In Editorial Committee for the Research Papers Celebrating the 50th Anniversary of the Foundation of the Department of English, Tsuru University (ed.), *Linguistics, literature and beyond: A collection of research papers celebrating the 50th anniversary of the foundation of the Department of English, Tsuru University* (pp. 81-109). Tokyo: Hituzi Syobo.
- 澤崎宏一 (2015) 「日本語の目的語省略における有生性の影響-量的データからの考察-」 深田智・西田光一・田村敏広(編) 『言語研究の視座』 (pp. 220-234) 開拓社
- 新屋映子 (2013) 「日本語の無主語文をめぐる」 『桜美林言語教育論叢』 9, 1-14.

- 宿利由希子・プーリク, イリーナ・ミロノワ, リュドミラ・ノヴィコワ, オリガ・カリュジノワ, マリーナ・シモノワ, エレーナ・大内将史 (2015) 「ロシア語母語話者の日本語役割語に関する意識調査—アニメ・マンガの役割に注目して—」『日本語文化研究会論集』11, pp.19-37.
- Stanovich, K. E., & Cunningham, A. E. (1992). Studying the consequences of literacy within a literate society: The cognitive correlates of print exposure. *Memory & Cognition*, 20(1), 51-68.
- Uehara, K. (1997). Judgments of processing load in Japanese: The effect of NP-ga sequences. *Journal of Psycholinguistic Research*, 26:2, 255-263.
- Uehara, K., & Bradley, D. (2002). Center-embedding problem and the contribution of nominative case repetition. In M. Nakayama (ed.), *Sentence processing in East Asian languages* (pp. 257-287). Stanford, CA: CSLI.
- 張昀 (2018) 「中国人日本語学習者における第二言語から第一言語への逆行転移—主語省略と目的語省略からの考察—」静岡県立大学修士論文